

キリスト教あるいは教派神道に所属することは、公式的には、仏教や神社神道の儀式的執行と相容れない。しかし実際には、非常に有名な神社には、信者ばかりでなく、キリスト教徒も出かける。種々の教派神道は、その葬式や追悼の儀式および墓地をもっているが、それと同時に、新たに改宗した教徒の家庭に仏壇があるのを見かけたことがある。すなわち、新しい信仰をとりながら、改宗者はただちに、祖先崇拜の伝統的形式と縁を切り、改宗者にとって新しい祭壇に祖先の位碑を移すとは限らないのである。北海道や東京の近郊で認められるように、キリスト教やその他の宗教の影響が、ここでは仏教の凋落のおかげで増大している。諸方の農村からそこに移ってきた人々は、もはや自分の属していた宗教と連絡をたもつことができず、新しい居住地では自分の一普通、小さな一宗派の寺を見出しえない点に、問題があるのである。

残念ながら、2カ月の期間では、おもな地方だけにせよ、完全に廻ることはできなかった。九州、四国、本州西部は調査しないままであり、本州北部では仙台地方だけを瞥見したにすぎない。それにもかかわらず、私は将来の研究のために多くの材料を集めることができた。まったくこれは、多くの日本の同学諸士の好意的協力と援助、および私に種々教えてくれた日本の勤労大衆があらわした、私の仕事に対する理解と協力に負うのである。

The 5th Meeting of the Permanent International Altaistic Conference (PIAC) に出席して

服部四郎

本年6月4日～9日に、米国インディアナ大学で開かれた。

PIACの由来は次のようである。1957年にミュンヘンで開かれた第24回 International Congress of OrientalistsのAltaic Sectionは、9月4日に次の決議をした。すなわち、アルタイ学に関する国際会合は、3年に1回開かれる国際東洋学会議のアルタイ部会だけでは不十分だと意見が一致したので、PIACとして毎年開くこととし、ドイツのBonn大学のWalther Heissig教授を1957年から1960年までの3年間のGeneralsekretärに選んで、その組織を委任した。

1961年のGeneralsekretärには、英国Cambridge大学のDenis Sinor教授が選ばれた。

このようにして、International Congress of Orientalistsとは独立に、PIACの会合は、次のように毎年1回ずつ開かれてきた。

第1回 Mainz, 1958年6月25日～28日

第2回 Mainz, 1959年6月23日～26日

第3回 Burg Liebenstein/Rein, 1960年6月26日～7月1日

第4回 英国 Cambridge, 1961年6月12日～16日

第5回 米国 Bloomington, 1962年6月4日～9日、参加者も、第1回は13名だったのが、第2回からは20名前後となり、今回(第5回)は30名を超えた。

今回の参加者名を国別にして示すと、次のようである。

Australia: Stephen A. Wurm (Camberra)

Denmark: Karl Thomsen (Copenhagen)

England: Charles Bawden (London), Sir Gerard Clauson (London)

Finland: Pennti Aalto (Helsinki)

Germany: Walter Fuchs (Cologne), Annemarie v. Gabain (Hamburg), Ulla Johansen (Hamburg), Klaus Sagaster (Bonn)

Hungary: Karoly Czegledy (Budapest), Odon Schutz (Budapest)

Italy: Alessio Bombaci (Naples)

Japan: Shirô Hattori (Tokyo), Sitirô Murayama (Tokyo), Nobuo Yamada (Osaka, now at Harvard)

Netherlands: Karl Jahn (Utrecht)

Poland: Ananiasz Zajaczkowski (Warsaw)

Turkey: Reşid Rahmeti Arat (Istanbul), Akdes Nimet Kurat (Ankara)

ソ連邦からは、モスクー大学のV. M. Nasilov教授が参加の予定だったが、都合のため来会できなかった。米国側からは、次の人々が参加した(括弧内は大学名)。

Schuyler van R. Camman (Pennsylvania), Cornelius J. Crowley (St. Louis), M. Dresden (Pennsylvania), Wolfram Eberhard (California), Janos Eckmann (California), Gerd Fraenkel (Indiana), John R. Krueger (Indiana), Dorothy Libby (Indiana), K. H. Menges (Columbia), Nicholas N. Poppe (Washington), Omeljan Pritsak (Washington), Alo Raun (Indiana),

Denis Sinor (Indiana), Andreas Tietze (California), Werner Winter (Texas)

大半が外国系の学者であることが注意される。その他オブザーバーとして、インディアナ大学関係の人々が出席、その中に朝鮮の李相讚氏、博士コース在学中の Nicholas Poppe Jr. の顔も見えた。李氏には図書館を案内して頂いたり色々親切にして頂いた。

筆者は、PIAC の Secretary-General である Denis Sinor 教授（ハンガリー人で、英国の Cambridge 大学の教授だったが、昨年から米国の Indiana 大学教授になられた由）から、本年2月28日付の手紙で、往復の旅費と滞在費を出すから参加しないか、との招待状を受けた。実は過去3回に亘って招待を受けたのだけでも、旅費の工面をすることがおっくうで参加しなかった。アルタイ諸言語（チュルク語、蒙古語、トゥングース語）の親族関係もたびたび論議せられていたようであり、なかなか興味深い会合だとは思っていたけれども。同封の circular によると、今回の会合での議題は次の4つであることが、前回の Cambridge 会合で決められたという。

- (1) The dwellings (houses, tents, etc.) of the Altaic peoples.
- (2) Forms of cultural and musical expression.
- (3) The diffusion of writing in the Altaic world.
- (4) Dress and ornament in the Altaic world.

これらの題目に関する論文を発表するというのではなく、discussion に参加して何らかの資料を contribute すればよいとのことだった。(3)以外の議題については、特に深い興味を持っていたわけではないが、既知・未知の人々と交わり、アルタイ学の動向を見聞することは、有益なことと考えたので、3月10日付で招待を受諾する旨返事を出すとともに、linguistic という言葉がどこにも見えないのはどういうわけか、discussion に対してはどのような準備をしたらよいのか、などと尋ねてやった。

それに対し、3月22日づけで来た返事には、PIAC の meetings は非常に informal なもので、congress というよりも、共通の興味ある事柄を discuss する good friends and colleagues の集りといったようなもので、各自が最近やっていることに関する詳しい報告をする習慣になっている、とあると同時に、次のようなことが書いてあった。アルタイ学者の大部分は不幸にして日本語が読めないの、日本におけるこの方面の研究

——言語学ばかりでなく歴史学、ethnography を含む——に関する詳しい報告もして下さるならば、非常に有難いのだが。今回は、議事録を出版し得る見込みなので、そういう報告をして頂けるなら、それをすぐ印刷に附し得る形で用意していただくことが望ましい。

私は、3月で大きな事務から解放されたとはいえ、いろいろの雑務が山積していたので、この報告はまじめにやるとなるとかなり重荷だった。しかし、出席する以上この報告をしないわけには行かないと考えた。

このような概観的な報告書を書くには、いろいろなやり方があるが、研究者諸氏にアンケートを出して、その上で関係の著書・論文を直接読むのが正道だと考えた。まずアンケートの送り先の調査に護雅夫氏の助力をお願いし、150名ほどの方々に発送したのがやっと4月15日、結局は120名近くの方々からご返事やご論文を頂いたが、報告の作成にとりかかったのは、5月の連休を過ぎてからということになった。

また日本のアルタイ学——昨年の S. E. Martin 助教授の話では朝鮮学を含むとのことだったので——関係の研究は、西洋人が想像するより遙かに多量なので、1ヶ月位のうちに片手間仕事に概観的な報告が書けるものではない。そこで言語学以外の研究については、護雅夫氏に報告を作成していただき、大東百合子氏に英訳していただいた。一方、自分は言語に関する著書や論文を読みながら英文でレジュメのカードを作って用意して行った。日本からは、ほかに村山七郎氏が招待を受けた。同氏には、旅費の一部を自弁するようになって来たとかで、返事を保留しておられたところ、出発すべき日の10日ほど前になって、突然我々2人に切符を送って来たのだった。

6月3日の夜、12時前に羽田発、飛行時間17時間半、途中日付変更で1日得をするので、4日（月曜日）のお昼前に Bloomington についた。参加者一同 Sinor 教授の家に勢揃いして昼食をとり、同日7時の dinner から正式に会合が始まり、5日（火）から8日（金）まで4日間、午前3時間、午後2時間の session があり、9日の breakfast で会を閉じたが、私は飛行機の都合で9日朝の7時過ぎに Bloomington を立った。そのほか每晚8時からレセプションがあり、中々の「強行軍」だった。ことに、羽田を立ってから20数時間のうちに昼と夜とが転倒するので、数日は何となく気分が変だった。

Session では2つのことが行われた。1つは慣例による“confession”で、参加者の一人々々が“victim”

になり、自分（および自国の研究者）がこの1年間に研究したこと、現に研究しつつあること、研究計画、などを詳しく話すと、皆からいろいろの質問・註文が出、また批評があり、情報が追加された。このようにして、居ながらにして世界中のアルタイ学の動向がわかるといってもよい有様だった。それだからこそ、蒙古およびソ連邦の学者が参加しなかったことが一層惜しまれた。とにかく、その雰囲気たるや実に気持ちのよいもので、質問にしても批評にしてもすべて建設的であり *encouraging* であって、共に真理を探求する *colleagues* の集りという感を深くした。卒直に言って、前世紀や今世紀前半のアルタイ学は、印欧諸言語の比較研究や文献学的研究と較べると、精密さにおいてかなり欠ける所があったと思うが、その水準は漸く高められつつあると言えよう。この点では、わが国の研究の一部は、決して低い水準にあったとは言えない。比較研究にしても、*Ramstedt—Vladimircov—Poppe* の線は極めて多くの貢献をしたが、さらに違った *approach* の必要を痛感していたところ、*Pritsak* や *Sinor* の根本的研究が進められつつあることを知って非常に心強く思うと同時に、いろいろの研究計画を立てながら、それを実現することの未だ非常に少ない自分自身を顧みて、自ら鞭打つ必要を感じた。これらの人々のやっていることは、金もうけとか、その他の実利とはおよそ関係のないことで、その献身ぶりは、常人からは気狂いざたと見られないとも限らない。しかし、その雰囲気の中にあると、戦時中戦後の生活の脅威の情性で、ややもすると生活のことを重視する傾向を生じた我々は、もっとひたむきな研究意欲を回復してもよいのではないか、という気がしてきた。

Session で行われたもう1つのことは *contribution* で、上記の *topics* に関する *discussion* に話題を提供するのがその主旨であったけれども、研究発表ないしは講演の形式に近いものとなったのは否めないと思う。それでもやはり、打ちとけた *discussion* が活潑に行われた。またその *topics* にしても、ほとんど実用とは縁の遠いものばかりで、学問的雰囲気を満喫することができた。一例を挙げれば、ハンブルグ博物館の *Ulla Johansen* 女史は、アルタイ諸民族の揺りかごと炉についてスライドを使って話し、前者を4つのタイプに分類し、つり下げのタイプは柱・テント式の家に、床の上に置くタイプは蒙古式の包に見られるが、包の細い組木はつり下げ式の揺りかごのためには十分丈夫ではなく、蒙古語の *ölägäi* 《揺りかご》は *ölgükü* 《掲げる》と同じ語根を含む語だろうから、蒙古人も元は柱・テント式の家に住

み、つり下げ式の揺りかごを使っていたのだろう。また蒙古人は一種のゴトクを使うのに、柱・テント式の家ではつり鍋が使われる。その他の分布状態や民俗学的・言語学的資料から見ても、アルタイ諸族の大部分は、以前は森林地帯で柱・テント式の家に住んでいたものと推定される、とのことだった。*Johansen* 女史がチュルク語の *beşik* 《揺りかご》の語原を問題にしておられたとき、*N. Poppe* 教授はヤクート語の *biliä* 《揺る》と同じ語根 **bel-* 《揺る》に由来するものと説かれた。同じ水曜日（6日）の午前は、スライドを使っての講演が2つあり、ハンブルグ大学の *Annemarie v. Gabain* 教授は古代ウイグル人の住居と衣服について、ケルン大学の *Walter Fuchs* 教授は18世紀のチュルク人、蒙古人の衣服について話された。そのほか *contribution* としては、ポーランドの *Zajaczkowski* 博士、イスタンブール大学の *Arat* 教授の方角に関する言葉の考察があり、ヘルシンキ大学の *Aalto* 教授の蒙古の民謡の話、ボン大学の *Sagaster* 氏の蒙古語・チベット語の經典に関する話があった。*Sagaster* 氏は *Heissig* 教授の弟子だけあって、その緻密な文献学的研究には感服した。村山七郎教授は、クツ（靴）、ピワ（琵琶）、フエ（笛）、コト（琴）という日本語を蒙古語・満洲語の単語と較べながら、これらの諸言語の祖語にすでにこれらの単語（の祖形）があったと説かれた。中々興味深くはあるが、こういう説を *prove* ないし *disprove* するにはまだ多くの研究を積み重ねなければならないと思う。村山氏は、日本語の *kutu* は、音韻法則的には朝鮮語で *kot* という形で現われるべきである（日本語ナク、シマ、グマなどに対し朝鮮語 *nat, syem, kom* など）にも拘らず、朝鮮語では *kutu~kudu*（靴）である点；中期朝鮮語の文献では「靴」に対して *sin* という語のみ見えて *kutu* が見えない点などよりして、朝鮮語の *kutu* は日本語からの借用語であると言われた。しかしこれは危いと思う。何となれば、朝鮮語において、村山氏の説かれるような第2音節の母音の消失がおこったとしても、この語（すなわち「クツ」に当たる語）の第2音節の母音が長かったとか、或は第2音節が閉音節であった（現に、村山氏が指摘されたごとく蒙古語では *gutul* 《靴》である）ために、朝鮮語において第2音節の母音が保たれたのかも知れず；或はまた村山氏の想定される第2音節母音の消失がおこった後に、朝鮮語に *kutu* という語が日本語以外の外国語から借用されたのかも知れず；また、中期朝鮮語の文献に見えないとしても、*kutu* という語が当時の朝鮮語に存在しなかったとは断定でき

ず(たとえば或別種の履物を表わす語として);この語が16世紀以後に日本語から朝鮮語に借用されたとすれば, *kutu* ではなくむしろ *kucu* という形を示すべきであろうし(有坂秀世『国語音韻史の研究, 増補新版』p. 563 以下); 総督府の『朝鮮語辞典』には *kutu* 《西洋製の靴》とあるけれども, それは新しい物に古い語を適用させたのかも知れない(日本語の「クツ」という語もそうである)から, まだまだ大いに研究を要する。小倉進平『朝鮮語方言の研究, 上巻』p. 138 によると, *ku-du* という形は, 全羅南北, 慶尚南北, 忠清南北, 京畿, 江原, 黄海の諸道すなわち南部中部地方に広く分布しているのに対し, *ku-dzu* という形は黄海道の一小部分と咸鏡南北道, すなわち東北部に分布しているに過ぎない。この分布状態から見ても, 日本で西洋靴を [*kutsu*] と呼ぶようになってからこの日本語が(中南部)朝鮮語に入ったのではないことは確かである。この講演に対する参会者の反応は微妙で, 私を含むすべての者が黙している中で, 座長が私の発言を求めたので, 私は, 少なくとも朝鮮語の *kutu* に関する限り, 村山氏の説が唯一の可能性ではない旨を説いておいた。

“Confession” に意外の時間を要した上に, *contribution* が中々多かったので, *discussion* に附する時間のないものが出てきた。

‘The diffusion of writing in the Altaic world’
by Gerard Clauson

‘Zwei türkisch-mongolische Korrespondenzreihen’ by K. Thomsen

‘The Mongol “Conversation-song”’

などがそれで, Budapest の A. Rona-Tas 氏は, 蒙古人の包に関する詳しい研究(記述的研究の部と比較・歴史的研究の部との2部より成る)の目次を騰写版刷にして配布したが, 本人が出席しなかったため, この興味ある話を聞くことができなかった。

しかし, 今回の第5回会合は詳しい議事録が印刷される予定だから, 活字となったものを読むことができるようになるであろう。

なお, 今回の会合は, 最初は多少英語が使われたけれども, ドイツ語が話され始めるとほとんどドイツ語になってしまった。Zajaczkowski 教授がフランス語で *paper* を読んだほかは, ドイツ語が圧倒的で, Sinor 教授も会合に関するいろいろな注意を英語でした後にドイツ語で繰返すという有様で, 会合の共通語はドイツ語だと言ってもよい状態を呈した。1950年の夏, パークレイで Ferdinand D. Lessing 教授にお会いしたとき,

「ドイツ語はもう世界語ではなく, 歐洲の一国語の地位に落ちた」と多少誇張して言われたことがあったが, 少なくともアルタイ学に関する限りは当らなかった。今回はフランス人の参加がなかったが, 我々の分野の国際会議では, 少なくとも英独仏露の4ヶ国語の会話が自在でないと不自由なのではないかと思った。それと同時に, 秀れた学者が, 外国語が自由に話せないために国際会議に出席できないのを残念に思う。

さて, 私自身のしたことについても, お話ししておく必要がある。confession の番が廻ってきたとき, 護雅夫氏に用意していただいた Trends in postwar Japanese historical studies of the Altaic peoples (大東百合子氏訳) を30分あまりかかって朗読した。すると直ちに Pritsak 教授から, Ural-Altische Jahrbücher にその原稿を頂きたいとの申入れがあったが, Sinor 教授が議事録に出す予定だと言われた。confessions が長くかかったのと, contributions が多かったのとで, 各自の持時間が制限され, アルタイ諸言語に関する日本の研究についての私の報告も, 20分位でできないかと尋ねられた。ところが, 時間をはかってみると, 1時間半位かかる。そこで, やむなく, 予め配布した書名・論文名・研究者名などのプリントについて質問を受け, それに答えることによって責めをふさぎたいと考えるに到った。そのつもりで居ると, はからずも最後の日の8日の午前に, 時間の制限なしで報告の機会を与えられた。私の報告は1時間あまりの間に, 極めて簡略に明治以来の研究史を述べたものに過ぎないが, 著書・論文の名前を挙げるだけでなく, 簡単ではあるがその内容を紹介するように努力した。たとえば, 『鷄林類事麗言攷』(1925)の著者前問恭作は朝鮮学の泰斗で, 最近『古鮮冊譜』(1944, 1956, 1957)の大著が出版されたが, この『麗言考』は, 1103年に日本に来た孫穆の著『鷄林類事』の高麗語を研究したもので, それが朝鮮語であることを明かにしている。同氏の『竜歌故語箋』(1924)は『竜飛御天歌』(1445)の朝鮮語を註解したものだが, 著者は15世紀の中期朝鮮語が厳格な母音調和(現代朝鮮語はその大部分を失った)を有したことをも発見している。等々。報告を終ると直ちに, N. Poppe 教授から「これほど多量の研究が行われていることを我々は知らなかった。同じ方向に向かって走っている汽車が隣にあるのを知らなかったようなものだ。何とかしてそれらの研究が我々に利用できるようにならないものだろうか。」という意味の発言があり, K. H. Menges 教授もそれに賛成され, 日本語の著書・論文を組織的に英訳して出

版する計画を立て、それを実現することが、満場一致で要望された。その昼休の時間に、私は Sinor 教授から上の計画の具体化についての相談を受けた。この時、Sinor 教授は、日本に1ヶ月ほど滞在して何を翻訳すべきかの相談をしたいとの意向を明らかにされた。我々は何とかそれが実現できるよう努力したいと思う。

8日の午後の最後の session では、PIAC の将来についてのいろいろな決議がなされた。Sinor 教授が今後5年間の Secretary General に選ばれた。来年の会合の開催地の第1候補として Helsinki が挙げられ、Aalto 教授が帰国後努力することになった。(将来は東京でも開かれ得ることについての言及もあった。) また、アルタイ学の分野で特に功績の著しかった者に対し、毎年1人ずつメダルが与えられることとなり、その選考方法が議決され、選考委員として Clauson, Heissig, Sinor, Zajackowski の4人が選ばれた。その前に、選考委員が自分自身を選ぶことができるかどうかについて票決が行われ、選べないこととなったが、選び得るという方に賛成の票が10票もあったのは、印象的だった。

その他、十分討議する時間はなかったが、自然科学や社会科学の分野で行われているような、著書・論文の abstracting service が提案された。第1次計画としては、日本語、シナ語、トルコ語、ペルシャ語、朝鮮語、ポーランド語、フィン語、ハンガリー語で書かれたものが対象となるが、できるだけ近い将来にロシア語、ドイツ語、フランス語、英語で書かれたものをも含ませる；公刊の方法は、*Central Asiatic Journal* のような雑誌に掲載するという従来の方法もあるが、新しい方法としては IBM の方式あるいは punch cards による方式で、読者が自分の必要とする部分を註文する、というやり方もある、などというのである。また、資料交換を効果的にできるようにしようという提案もあった。或研究目的で集めた資料が不要となったり、近い将来に使わなくなった場合、それを必要とする colleague or

groups of colleagues に提供し、逆に自分の必要とするものの提供を受け得るように、この種の資料のカードを作ってそれを公刊し、資料交換の制度を確立しようというのである。もしこれが実現すれば、すばらしいことだと思ふ。

これを要するに、PIAC のこの会合に出席して、同じ学問の道に志す者の会合が如何に有意義で如何に楽しいものかということ、身にしみて感じた。それは、政治的に作り出された何らかの境界線とか国境を超えた、というよりは、そんなものを問題にしない、そんなものを度外視した colleagues の集りで、それに参加することのできた自分を非常に幸福に感じた。この会合に出席できなかった colleagues には、特大のはがきに寄書きをして送ったが、それは Cleaves (米国)、Ligeti (ハンガリー)、Mostaert (米国)、Nasilov (ソ連邦)、Rintchen (蒙古) 等で、この顔ぶれからも、この会の学問的性格の一端がうかがわれる。ただ、フランスの Hambis のような学者の欠席が一抹の不安を与えるが、その原因について問い質すことはしなかった。それが偶然に起因するもので、フランスの学者の不参加を意味するのではないことを希望してやまない。

また、わが国における、我々の専門に関係した学会との大きな違いは、言語学・民族学・民俗学・歴史学・文献学等々の専門家のばらばらの寄り合いではなく、いろいろな研究傾斜を持った学者たちが、親しい colleagues として大きな1つの家族を形成するかの観のあることで、従って、これら諸分野相互間の知識の交流も円滑で、全体的に見て学問の進歩に非常に好ましい条件を作り出していることであつた。

政治的・学問的境界を学問の世界において撤廃すること、学問の進歩に最も大切な条件であることは明らかで、そういう無境界状態を観念的に考えることは容易だが、実現は極度に困難だと思っていたが、この会合に出席して、大きい希望を懐くようになった。(本協会々員・東大教授)